

幼児教育史学会 会報

第 11 号

目 次

第 6 回大会報告

会長あいさつ

研究発表・講演

第 6 回総会報告

「第 6 回幼児教育史学会の会場校をお引き受けして」……………

立浪澄子（長野県短期大学）

第 6 回大会参加記 ……………河合隆平・松島のり子・

志村聡子・杉浦英樹・畠山祥正

会員研究情報

「倉橋惣三における優生思想—思想史的研究法の

デモンストレーションとして—」…吉田直哉(東京大学・院)

寄贈図書

事務局からのお知らせ

第 6 回 大会報告

会長あいさつ

宋戸健夫（愛知県立大学名誉教授）

本日は、遠いところからも、多数参加してくださいましてありがとうございます。また、この大会のために、立浪会員を中心に長野県短期大学の皆さんが準備してくれましたことを深く感謝します。

今回は、5人の会員による研究報告があり、午後からは「実践記録と歴史的研究—保育実践史研究所説」をテーマに「講演・討論」があります。また、明日は例年のように海外の研究動向をフォローする会があります。充実した研究討議が期待できることを嬉しくおもいます。夕方からは、善光寺の宿坊で懇親会もあります。どうか、じっくりと2日間にわたって研究討議を深めていただきたいと思います。

研究発表

司会： 太田素子（和光大学）
小玉亮子（お茶の水女子大学）

- (1) 桜井女学校幼稚保育科卒業生吉田鉞の保育思想とその実践
－室町幼稚園の保育カリキュラムに着目して－ 田中優美（東京学芸大学大学院）
- (2) 長野県子守学校の指導者中村多重に関する考察
－明治20・30年代の子守教育論の検討－ 近藤幹生（白梅学園短期大学）
- (3) 戦時下保育運動における「困った子供の問題」研究
－「保育問題研究会」第三部会を中心に－ 浅野俊和（中部学院大学）
- (4) 高度経済成長期の農村における教育家族の増大 小柳康子（福岡大学）
- (5) 松村康平氏の人間関係論
－幼児教育思想史を形づくる一人として－ 小川博久（聖徳大学）
- (6) 韓国における遊びの伝統と現在 韓 在熙（四天王寺大学）

講演

「実践記録と歴史的研究－ 保育実践史研究序説」

講師： 宍戸健夫（愛知県立大学名誉教授）
コーディネーター： 丹羽 孝（名古屋市立大）

第6回 総会報告

報告事項

1. 第5回大会年度(2009. 10. 1～2010. 9. 30)会務報告
 - (1) 会員数
2010年11月末現在 133名 除籍(年会費3年未納)者1名を除く
 - (2) 第5回大会
2009年12月5日、法政大学にて開催された
 - (3) 機関誌
 - 1) 『幼児教育史研究』第5号の刊行
・2010年11月30日に発行した(発行部数200部)
委員長 阿部真美子会員(投稿論文担当)

副委員長 太田 素子会員（書評担当）

- ・投稿論文総数 5 本、うち研究論文 1 本、研究ノート 2 本を掲載した
- ・そのほか講演記録、ならびに書評・図書紹介計 5 本を掲載した

2) 機関誌第 3 号の増刷（30 部）

(4) 会報の発行

9 号を 3 月 1 日、10 号を 7 月 5 日に発行した

(5) 会報 Web 公開版の作成および公開

- ・第 5 回大会総会決定に基づき、会報の公開を開始
- ・会報第 9 号、第 10 号の Web 版（原版より個人情報・会務報告を削除）を作成、公開

2. その他

なし

審議事項

1. 第 5 回大会年度（2009 年 10 月 1 日～2010 年 9 月 30 日）決算について

2. 第 6 回大会年度事業計画について

- (1) 機関誌『幼児教育史研究』第 6 号の発行
- (2) 会報の発行（年 2 回）、ウェブ版の公開
- (3) 第 7 回大会の開催準備
- (4) 機関誌のウェブ公開に向けたワーキング・グループの始動
- (5) 第 2 回理事会選挙の実施

- ・時期は 9 月を予定
- ・理事 10 名、監査 2 名を選出
- ・詳細は後日文書にて通知

3. 第 6 回大会年度（2010 年 10 月 1 日～2011 年 9 月 30 日）予算案について

4. 機関誌の編集について

- (1) 第 6 号の編集委員長、副編集委員長
 - ・申し合わせに従い、正副編集委員長は 1 年交替とする
 - ・第 5 号の編集委員長、阿部真美子理事を、新年度の副編集委員長（書評担当）とする
 - ・新編集委員長（投稿論文担当）は、古沢常雄理事とする

(2) 投稿募集その他

- ・編集規定に従う
- ・大会記録、書評・図書紹介等の掲載内容に関しては、編集委員会に一任
- ・投稿原稿の締め切りは 2010 年 6 月 30 日（消印有効）、11 月末刊行、発送予定

5. 会報の発行について

(1) 発行時期

- ・従来通り年 2 回 2 月末（第 11 号 大会報告号）
6 月末（第 12 号 大会発表申込用紙同封）

(2) 内容

- ・会員研究情報欄の充実に努める

6. 第 7 回大会について

- ・会場：和光大学（実行委員長 太田素子理事）
- ・日程：12 月 3 日（第 1 土曜日）

7. その他

(1) 会報のウェブ公開

- ・創刊号～第8号の公開を、最近のものより順次進める
- ・個人情報（会員異動欄）は掲載しない
- ・会務に関する内容は掲載しない
- ・総会における公開決定以前の号については、
投稿・原稿依頼者に公開の可否を問い、可としたもののみ掲載

(2) 機関誌のウェブ公開

- ・小玉亮子会員を中心に、機関誌公開に関するワーキング・グループを組織し、
検討を開始する

第6回幼児教育史学会の会場校をお引き受けして

長野県短期大学 立浪澄子

榊事務局長より2010年度の大会開催の打診を受けたとき、正直とても戸惑いました。なにしろ長野県短期大学は短大であり、校舎は狭くて古いし、設備も不十分です。大勢の会員が快適に討議に集中していただけるような場を作れるだろうか、まったく自信はありませんでした。しかし「ないないづくし」は幼児教育研究分野では当たり前のこと、事務局のみなさんがどなたも身を削る思いでがんばっていらっしゃるのを傍目に見てきた身としては、どうして断れましょうか。

そういうわけで、会場の不備は重々承知しつつ、同僚の藤坂会員と二人で一生懸命準備を進めて参りました。締め切りが間近となっても発表申し込みが1件もなかったときは、あわやと思いましたが、締め切り日には昨年より1件少ないだけの6件の申し込みがあり、心からほっといたしました。うちわけは国内のものが5件、国外のものが1件でした。

プログラムを作成するに当たっては、地方都市開催であることからだいぶ迷いましたが、やはり参加者皆さんに発表をお聞きいただきたいという思いで、すべてひとつの会場で発表させていただきました。

申し訳なかったのは全国各地よりご参加くださった38名（事務局2名を除く。）の方々です。相当の強行日程のため、前日、あるいは朝早くから長野へお越しいただく結果となり、心苦しいながらも、苦い顔をされる方もなかったのは、ありがたい限りでした。

事前に発表内容をもっとくわしく知りたいという声に答えて、今回は発表者のみなさんに事前にお寄せいただいた発表概要を印刷し、プログラムと一緒に送りました。幸いこの試みはみなさんに好評でした。

慣れない受付事務に追われ、当日資料を片付けに行ったときはすでに引き上げてあるものもあり、私自身は発表内容を細かく知る機会がありませんでした。発表の成果については参加者のご感想等をご参照いただきたいと思います。

懇親会は善光寺の近くの宿坊で24名の方が参加され、精進会席料理をご賞味いただきました。広い座敷で、季節のもの、土地のものを肴に、おいしいお酒で和気あいあいと楽しく研究談義をさせていただきました。

今年の冬は雪と氷に閉ざされた長野のキャンパスです。白一色に染まった窓外に、それでも木の芽が膨らみつつあります。季節は確実に巡り続けています。また皆さんに再会できる日を楽しみに。

第6回大会参加記

河合隆平（金沢大学）

大会への参加は2回目となる。障害児教育の領域で学ぶ身として、幼児教育史学会は保育や歴史研究を学ぶことができる貴重な機会である。恥ずかしながら、私などは発表内容を理解するだけで時間切れになることが多い。前回拙い発表をさせていただいた自身への反省も含めていえば、発表者には、しかるべき研究手続きがとられていることを前提に、顔のみえる距離での対話にふさわしい報告のスタイルが求められるのではないかと感じた。いずれも丁寧に史料にあたられ、分析と記述を積み重ねられた研究であるだけに、参加者との議論・対話の窓口をより明確に示していただけたら、発表者の課題意識などもさらに共有されるのではないだろうか。これは私自身の課題であるから、言いつばなしは無責任であり、自分の研究発表を通して具体的に考えなければならないと思っている。

さて、保育実践のあゆみに即して保育史研究を進められてきた宍戸先生の講演は、個人的に非常にタイムリーであり、重く受け止めた。というのも、近年、医学に端を発した「エビデンス・ベースド」（証拠に基づく）がさまざまな領域に広がり、障害児保育・教育でも不可避の問題になっている。しかも、「エビデンス」として採用されるのは行動指標や統計処理・数値化されたものであり、そこに乗りにくい、しかし保育・教育実践の要である子どもの感情や内面は捨象されてしまう（国際ジャーナルでも事例研究はエビデンスが低いとされ、ブリーフノート扱い）。こうした動向がPDCAサイクルなどとも相俟って、実践現場では子どもの行動変容や短期間の変化に目を奪われやすい状況が広がっている。

しかし、日本の保育実践には実践記録というメディアを通して子どもの発達の事実を長期かつ深部においてとらえ、保育実践を構造化してきた分厚い蓄積があるということを講演で学び直した。そして、実践記録に残された子どもの発達や保育の事実について、それらを「事実」として理解・評価しようとする保育者の認識枠組みや価値観、それを規定する社会・文化のありようにまでさかのぼって明らかにすることが歴史研究の役割であると再認識させられた。しかも、宍戸先生が指摘された「目立たない地味な保育実践」にこそ、心理学や医学からの借り物ではない、保育の内側にある「エビデンス」を探り当てる契機があるのではないかと考えた。

最後に、細やかな配慮のもとに大会準備・運営の労をとられた立浪先生、学生スタッフの皆さんに感謝申し上げます。

松島のり子（お茶の水女子大学・院生）

2010年12月4日、長野県短期大学で開催された幼児教育史学会第6回大会に参加させていただきました。大会準備委員の立浪先生はじめスタッフのみなさま、発表者や参加者、学会を支えてくださっているみなさまに心より御礼申し上げます。

2度目の参加となる幼児教育史学会の大会でしたが、当日の研究発表を拝聴して、改めて幼児教育史の領域は幅広く、多様な切り口から研究が進められていると感じました。何を対象とするか、いつの時代を取り上げるのか、どこの国・地域のことなのか、そのなかの思想・運動・実践…など、さまざまです。研究の最先端を学ぶことができましたし、幼児教育史研究はさらに深められる可能性があると思いました。私自身は戦後日本における幼稚園

と保育所の普及とその地域差について研究を進めていますが、幼児の置かれるあらゆる環境が個々の育ちに影響を及ぼすものであることを考慮すると、保育施設の普及に関しても、より広い視野をもって資料を収集、分析、検討していく必要を痛感しています。

幼児教育史研究の礎を築き、今も現役で研究の最前線にいらっしゃる先生方や研究者の方々と、保育史・幼児教育史研究を発展させていく場を共有できることはこの上なく有り難いことと思います。そうした場を大切にしていくとともに、常に考えておきたいことがあります。それは、歴史研究であっても現在とのつながりを忘れないこと、研究と実践とをつないでいくこと、広い視野をもって保育史・幼児教育史研究を深めることです。保育に関心をもつなかで、なぜ歴史研究なのか。幼児教育史研究に取り組むのであれば、当然答えられなければならないのに、いまだ明確な答えを持っていません。現在の保育・幼児教育につながる歴史のあゆみを明らかにしていく作業を続けるなかで、こちらも考え続けていきたいです。

翌日の「愉フォロ会」でのご報告も含め、研究への意欲を一層高められた大会となりました。本当にありがとうございました。

志村聡子（埼玉学園大学）

私の勤務先では、毎年12月第1土曜に入試業務が入るので、このところ本学会の大会に参加できませんでした。第6回大会も諦めようと考えていたのですが、プログラムに目を通して、どうしても行きたいと思い、いろいろ経た結果、参加することができました。

まず、午前中の研究発表について振り返ってみます。田中会員のご発表を通して、あらためてキリスト教主義幼稚園の果たした大きな役割について思いをはせました。宣教師の歩みに詳しい小林恵子会員からのご教示も、印象に残ります。近藤会員の「子守学校」に関するご発表からは、背中に幼子を背負って学校に来る子どもが、その負担から解放される時、母親がその責めを負うことになるのかなあと、考えたりいたしました。浅野会員の「保問研」に関するご発表では、丹念な作業に敬服するとともに、以前個人的にこだわっていた青木誠四郎の動きや発言に勝手に注目して(!)、青木の別の活動と重ねました。小柳会員のご発表からは、高度経済成長期が歴史研究の射程に入ってくるという新鮮さに、素朴に「私もやってみよう」と、力をいただく思いがしました。小川会員のご発表から、小川会員が各地の幼稚園に出向いて指導をなさっている実践の背景に、松村「人間関係論」の知見が生かされていると知り、松村理論を学んでみたいと思いました。韓会員による、韓国で「伝統的な遊び」の価値が見出されているとのご発表から、子どもたちの間で遊びが伝承されない、希薄な人間関係のありようが読み取れました。

午後は宍戸会長のご講演でした。歴史研究において緻密なお仕事をされてきた一方で、現場の保育者とも向かい合い、実践の場にも足を運んでいらした、宍戸会長の姿勢があらためて明らかになったように思われました。そして、コーディネーターの丹羽会員や、大会事務を担ってくださった立浪会員も、ともに「歴史研究も、現場も」の姿勢で取り組まれてきたとご発言からわかりました。午前中の研究発表でも、「保問研」関係者の姿や、小川会員のご発言から、「研究も、現場も」とともに引き受けるあり方が印象に残っています。「さあ、自分をどうしよう」と考えながら、長野新幹線に乗って帰路をたどりました。

第6回大会事務局や関係する皆さま、貴重な学びの機会をありがとうございました。

杉浦英樹（上越教育大学）

第6回大会では、ほぼ時系列的に並んだ6つの報告に接することができました。人物、組織を問わず事例の検討は何らかの通史的なパラダイムと往還しながらでないと言葉の隅を突くようなことになりかねず、難しさを痛感しているところですが、諸報告からはさまざまな示唆を与えられました。

宍戸先生の講演は、新著『保育実践のまなざし—戦後保育実践記録の60年』編纂の経緯をじかに楽しくうかがうことができ、ありがたく感じました。「第一次的資料」としての実践記録について、懐かしい勝田のことばが引かれました。さまざまな教育・保育場面に共感し力してもらいながら、やはり歴史から逸脱できない者として、そこに示された意味を読み解くことの責任を喚起させるものであると思いました。

カリキュラムの「3つの層」については、倉橋も近似の構造を示していたことが思い出されました。公教育は「生活」「経験」「系統」をカリキュラム内に組織せざるを得ない宿命をもっているのでしょうか。ふだんの「生活」と望ましい内容の「系統」と、それらを媒介する総合的、協同的な「経験」と。それらが予定調和の関係にはない（整合は不可能である）ために、真摯な教育者・保育者ほど悩むことになるのでしょうか。

さて、大会後の宿坊は小綺麗で快適、お酒もOK。「修行」のはずが意外な息抜きの場となりました。善光寺には何度も訪れていたのに、寒さの中にも強靱な数名の先生方とご一緒させていただいたお朝事は別の様相、蕎麦と味噌ソフトしか知らなかった私にも次々と新発見が…。馴染みすぎるとかえって知らないものですね。

大会だけでなく貴重な機会をご用意くださった立浪先生をはじめ、準備委員会の方に感謝しています。（蛇足の疑問：）宿坊のガイドさん曰く「あの世はとてもしもいたい。誰も帰ってきません」。これ、故水上勉の言という記憶があるけれど、彼とガイドさんと、どちらが先なのでしょう…あるいは？（2011.1.28）

畠山祥正（北陸学院大学）「長野で考えたこと」

4月から勤務先を北陸学院大学（金沢）に移しました。金沢からは特急を直江津で長野行き普通列車妙高に乗り換えます。接続がよい列車は数本に限られますので、前日昼に着いて松代の文武学校に足を伸ばしました。藩校がそのまま残り、しかも現在も各種道場に使われていることを知りました。他地域の荒天とは無縁の恵まれた見学ができました。

今回も学ぶことが多々ありました。宍戸先生の講演ではこの学会の研究方向が保育内容方法の現在とこれからを見据えたものであることが確認できました。実践記録の意味についてこれほど深い議論が行われるとは予想していませんでした。その場にいることの醍醐味を感じました。意見交換の場で論点が鮮やかに浮かびあがったのは圧巻でした。

しかし、そうした充実感を感じるほどに、午前の研究発表については疑問がわいてしまいました。帰宅後に届いていた論集には論文審査の厳しさを感じましたが、そうならば発表の場でももう少しきちんとした評価や論議がなされてもいいのではないかと思ったのです。史料を無批判に使ったり、大きな流れの中の細かい部分を連続的に取り上げ続けるのはいかなもののでしょうか。どういう言い方をしたらいいものか、私も迷ってしまうのですが。研究発表者が多いことはいいことかもしれませんが、少ない場合は討論の時間に余裕が生まれます。むしろそれを生かせないかと思いました。

海外の幼児教育史の研究動向を愉しみながらフォローする会

事務局：塩崎美穂（お茶の水女子大学） smiho@baci330.to

日程：2010年12月5日（日）9：30～12：00

内容：

村知稔三（青山学院女子短期大学）

「現代ロシアにおける保育改革とその結果—日本への示唆に着目して—」

和田悠（日本学術振興会特別研究員）

「松田道雄の保育思想」

会員研究情報

倉橋惣三における優生思想

—思想史的研究法のデモンストレーションとして—

吉田 直哉（東京大学大学院・院生）

幼児教育を、思想史的に研究するとは、どういうことだろうか。ある思想家の言説は、彼自身の言説であると同時に、彼の生きた時代の言説の束の中にも位置づけられうる。それは、彼の言説を規定すると同時に、彼の言説によって働き返されるものでもあるという点で、相互代謝的な影響関係にある。

我が国を代表する保育思想家であった倉橋惣三の思想もまた、同時代のエピステーメー（知的前提の連関）の中であって、それとの交感関係から紡ぎだされたものである以上、同時代の言説史を詳細に改め、その言説構造の布置の内部における、倉橋の言説の位置価値を見定めていくことは、倉橋を思想史的研究の対象に据えようと試みる場合、必須の作業であると言わざるを得ない。

本論では、明治末期から昭和にかけて大きな影響を振るった思想=疑似科学である「優生学」が、幼児教育思想に及ぼした影響を検出するために、優生思想が倉橋の保育思想に浸透し、彼の保育思想を補完するものとなっている様を明らかにしてみよう。

一般に、倉橋は、幼児の発育に対する環境的要素の重要性を訴えた環境主義的論者として認知されている。しかし、環境を重視し、子どもの自発性を称揚する児童中心主義的な思想と、優生思想は背反するどころか、親和性を持ち続けたことが、近年の思想史研究によって明らかにされている。例えば、エレン・ケイにおける優生思想を検討した岡部[2001]、あるいはモンテッソーリにおける優生思想を検討した山内[1998]などがそれである。

倉橋自身の優生思想を明らかにするために、かれの優生思想が端的に述べられたエッセイ「真に子供のため」(明治45年、『婦人と子供』第12巻3号)を検討してみよう(倉橋[1912a])。本エッセイに着目した研究としては、既に本田和子のものがある(本田[2000])。しかし、本田の研究は、自由主義的で知られた倉橋思想に、優生思想が内在していたことを暴露するに留まり、優生思想が、倉橋の保育思想といかなる関係を取り結んでいたのかを検討していない。

倉橋は、当該エッセイの中で、まず「親を選ぶ権利」というキーワードを提示する。「先づ吾々の第一に考へなければならぬことは子供を真に幸福に生むことである」と述べた後で、

「子供の幸福」を願う子供への「愛」が、子供の出生に関連してくることを、倉橋は以下のように述べる。

愛心の初まりは子供を如何に生むかという處から初まらなければならぬ。彼の不具の子供は誰れが生んだのです。彼の白痴児は誰れが生んだのです。或は天命などといふて、人を慰め自分も慰めて居る。併し其の子供等の不幸の責は一體誰れにあるのでせうか。こういふ子供達の不幸の原因を學問的に調べて見ると、多くは父親の不身持であるとか、懐妊中の母親の不注意であるとか、或は結婚の誤りであるとか、要するに何も知らない可憐の児が、生れながらに親の罪を負はされて居るのである。

ここで、倉橋が援用するのは、児童中心主義の旗手であったエレン・ケイである。ケイの著作の最初の邦訳(『婦人と道徳』本間久雄訳、南北社)刊行が、大正2年(1913年)であるから、倉橋の以下に見る紹介は、それに先立つものということになる。

有名なエレン、ケレーといふ人は「子供の世紀」といふ本を著して眞に子供の友としていろゝ世間の大人達を誠めて居る内に、「親を撰ぶの権利」といふことを言つて居る。そして其の中に「寧ろ生んだ罪を親から謝さねばならぬ方が遥かに多い様である」といふ様な言葉がある。

このようなケイの言説に対して、倉橋は「斯ういふことを思ひ度くはない」と前置きしつつも、「之れは理に於ては事実である」と認める。

厳肅な遺傳の理や、細心な胎教の誠めの前に、我々の心を是非常に引しめて居たいと思ふのである。私は不品行に身を持ち潰して居る人々を見て常に思ふ。大酒に骨を腐さらせ、其の危険を知らながら病毒に身を爛かして居る人々を見て常に思ふ。何も六かしい理屈や高尚な教えの助けは借らずともいゝ、我が生む子供のためといふ心一つで、戦き恐れて身を慎まねばならぬではないかと。「親を撰ぶ権利」といふ語気が荒過ぎるならば、「親となる資格」といふ語で眞に子供の為に自ら深く省みようではありませんか。

倉橋が「環境」を重視する、いわば環境主義者であったことは、彼が、遺傳的な器質を全く無視していたということと矛盾しない。むしろ、上に掲げた引用からも明らかなように、環境保育が成立する前提として、遺傳的な「欠陥」を持たないことを条件として掲げているのである。

そして、重要なことは、明治末年から対象にかけて、ドイツの「民族衛生学」が日本に盛んに紹介され、それがひとつの思想的流行を形作っていたということである(加藤秀一[2004])。倉橋の思想もまた、このような、同時代的な思潮に棹差すかたちで形成された。そして、それは、倉橋の保育思想の「妨げのない自由な発達」ということ的前提条件を保証するものとして、重要な位置を与えられたのであった。

今日的な視点から見て、倉橋の優生思想において注目すべきなのは、「劣等形質の除去」を、いわゆるポリス型の権力が統治性として担う政策として、一元的なかたちで実施しようと考

えては居なかったという点である。そうではなくて、彼が考えていたのは、家族、ことに出産・育児に関わる両親の節制、自制による劣等形質の除去であった。つまり、倉橋における優生思想は、ポリス権力が発動するマクロレベルでの優生学ではなく、家族ユニットが「自発的」に遂行する、「節制」としてのミクロレベルでの優生思想なのであった。それは、果てしない過程としての「自己管理」を不可避に要請するという点で、再帰的なものだったのである。

巷間語られて来たように、倉橋の保育思想が、フレーベル主義という西欧近代教育思想の摂取とそれとの対決の中から形成されてきたと見なすならば、倉橋の保育思想もまた、西欧近代という巨大な問題群との連関のなかで読み直されなければならない。それは、〈近代〉として倉橋思想を再発見することであると同時に、〈近代〉という状況の内部における倉橋思想の独自性、あるいは位置価を再点検していくという作業を伴うだろう。〈近代〉という地平の上で倉橋と切り結ぶこと、それが、近代-以後^{ポスト・モダン}を切り拓こうとする幼児教育思想研究という領域で、倉橋と「出会いなおす」ということの真意なのではないだろうか。

参考文献

- 本田和子 2000 『子ども 100 年のエポック』フレーベル館。
加藤秀一 2004 『〈恋愛結婚〉は何をもたらしたか』筑摩書房。
倉橋惣三 1912a 「眞に子供のため」『婦人と子供』第 12 卷 3 号。
——— 1912b 「母の為子の為」『婦人と子供』第 12 卷 8 号。
岡部美香 2001 「子ども中心主義の教育学と優生学のインターフェイス—E・ケイ『児童の世紀』に見る自律的な主体であることという呪縛』『近代教育フォーラム』(10)。
山内紀幸 1998 「モンテッソーリにおける「子ども」：19～20 世紀転換期の優生学的な知の中で」『教育哲学研究』(77)。

寄贈図書

- 青山学院大学教育学会紀要『教育研究』第 54 号 (2010.)
是澤広昭 『青い目の人形と近代日本—渋沢栄一と L. ギューリックの夢の行方—』
(世織書房 2010. 10)

事務局からのお知らせ

(1) お見舞いとお詫び

東日本大震災で被災された会員の皆様には、心よりお見舞い申し上げます。また、担当者の都合により、会報の発行・発送が大幅に遅れましたことをお詫びいたします。

(2) 第 7 回大会

第 7 回大会の開催日・会場校が決まりました。2011 年 12 月 4 日(土)・和光大学です。詳細につきましては、会報第 12 号(6 月発行予定)に掲載いたします。

(3) 会費納入のお願い

第6回大会年度（2010年10月1日～2011年9月30日）の会費納入用振込用紙を、昨年11月末に機関誌と共にお届けしました。今回、会報第11号に振込用紙を同封いたしましたのは、2011年2月25日の時点で第6回大会年度およびそれ以前の会費が未納であった会員のかたがたです。行き違いが生じましたら、ご容赦ください。

(4) 会報原稿の募集

会報を通じて、研究情報の提供ならびに研究者間の交流に努めます。会員研究情報、海外幼児教育だより、提言などをお寄せください。分量は、3,000字程度で、メール、または郵便で（なるべくデータを付けて）、事務局宛にお送りください。年2回の会報発行時（2月、6月を予定）までに届いた分を、随時掲載します。

(5) 名簿の作成と所属・住所変更届のお願い

春は異動の多い季節です。本学会の会報・機関誌はメール便を使っておりますので、住所変更のご連絡がない場合はお届けができなくなります。必ず変更届をご提出ください。

6月末日付けで第5回大会年度（前会計年度）の会費が未納の会員につきましては、役員選挙の選挙権・被選挙権を失いますので、ご注意ください。

幼児教育史学会会報 第11号 2011年 3 月 25 日

編集・発行 幼児教育史学会事務局 榎 瑞希子

〒271-8555 千葉県松戸市岩瀬 550

聖徳大学大学院教職研究科 榎 研究室 気付

TEL: 047-365-1111 (代表)

E-mail: admin@youjikyokushi.org

学会 HP: <http://youjikyokushi.org>

郵便振替口座 00190-9-73668 幼児教育史学会